

生きてることが全て芸術だ



福岡市立美術館作成のビラにもあるよう熱気と混乱に満ちた九州派の軌跡は、今なお、「前衛」とは、「地方」とは、そして「近代」とは何かという問いを発し続けているのです。このことを美術館は重要視してくれて、日本の美術館では初めての試み、九州派展示場の三分之一にあたる約百 m の壁面を、「新作を含む実験展示室」として出品者に開放しました。出品者は美術館内の会議室にて美術館関係者、地元美術ジャーナリストと共に、集会を開き桜井孝身を責任者に任命しました。そこで桜井は“九州派展を成功させる会”を新たに作り、美術館学芸員が渾身を込めて集めた約九十点の作品のならば四角形をなす会場を核とし、その奥にある「実験展示室」あるいは「インパクト展示室」が流出し、その芸術は一大流出物となって美術館の両玄関口から広場へと拡大、「ドリーム・野外パフォーマンス」への呼びかけへと発展しているのです。

思えば昭和 30 年 1 月 1 日、今年が 68 年だから 3 年前のことになります。縮小していますが、次頁のものが当時の街頭にでた美術の秋の記事であります。それから、1962 年 11 月 15 日、我々は福岡市百道海岸にて『英雄たちの大集会』というものをやりました。その時の呼びかけ文に『ウエスト・サイドという映画を見た。この映画の成功は非常にオーソドックスに扱った点に感心した。芸術とは大衆が感じないままに内臓しているエネルギーを解放してやることだ。その点エネルギーの源泉をプエルト・リコの移民の最下層に求めガラクタ者をロミオとジュリエットの王侯貴族趣味の錬金術で練り上げたところは立

派なものでその点いま流行のガラクタ芸術の水準物だ。ウエスト・サイドを持ち出したのは農民会館でオチ氏が提案し私や尾花氏が長々と説明した「トランク展=仮称」がウエスト・サイドという映画以上に立派で前衛だということを説明したいからです。岡本太郎の偉大さは下手くその絵ほどよい。絵はだれでも描けるのだと宣言したことにつきま

す。』

これでおわかりいただけたと思うのですが、26年前のものながら、いまだに、その基本的考え方は変化していません。それゆえ、またトッピなこととして野外パフォーマンスへの呼びかけとなりました。そして、今や岡本太郎先生の言葉を一步前進させて、人生、生きていることすべてが『芸術』だ！とします。人間が行為する、すべてのことが行われ展示されることが出来ます。その考え方については続々と後述いたします。